

# オーエン・ブルジョア説にかんす研究覚書

渡 辺 義 晴

いまから10年前、筆者はオーエンの性格形成論につづいた時期のオーエンの論説のなかから、これはおもしろいとおもうものを抜粋して翻訳した。その仕事は「世界教育学選集」の一卷「社会変革と教育」という題名で上梓した。<sup>①</sup> この仕事はこの選集の監修者故勝田守一君の依頼によってしたもので、筆者にとってはかなり偶然のことであった。しかしながら、哲学史のうえから社会主義思想の系譜を追ってみる関心をもっていた筆者としては、たいへんありがたい機会となった。<sup>②</sup> おかげでオーエンの書いたものや彼の行動を比較的ていねいに読んだり、調べたりすることができた。とくにオーエンの空想的社会主義はこんにちには克服されたとされつつも、とても有益な思想の要素が含まれているということを知った。教育のとらえかたについても、きわめて新鮮なものを教わることができたとおもう。要するに筆者はかなりオーエンのファンになったということができる。その後オーエンを中心に勉強している若い友人を得る機会にめぐまれたり、わがくにのオーエン研究の大略の事情もうかがえて、たいへんありがたいと感謝している。

さいきん中央大学経済学部の土方直史氏<sup>③</sup>はわがくにのオーエン研究史にかんする、くわしい、ていねいな研究報告をしてくれたが、非常に有益であった。それを見て、近頃わがくににもいわばオーエン専門家というものも出現し、そのひとたちのあいだで論争みたいなものさえあることを知った。筆者が興味をかんじたのは、オーエンの新解釈としてつぎのようなものがあることである。オーエンを科学的社会主義の創始者たちが「空想的社会主義者」と規定しているのは有名であるが、これを教条的にとってしまうのはまちがいだといのである。土方氏によるとこんなのが「オーエン・ブルジョア説」というものである。オーエンをプロレタリアの思想家のようにとるのはもちろんのことまちがいで、むしろオーエンは資本主義と資本家の思想家であったことを基礎的におさえておかねばならない。おおよそこんな解釈である。土方氏は「1950年代末から60年代にかけて提起された〈新解釈〉が投じた波紋は60年代をこえて70年代にもひろがろうとしている」と書いている。オーエン研究の専門家ではない筆者はこういう論争に割りこんでいこうという興味をもっているわけではない。しかし、上述したとおりオーエン思想から学ぶところ多いとかがえる一学徒として、他方現代わがくにの階級闘争に参加し、思想と教育をそのたたかひのなかでいかに位置づけるかを実践的にかんがえる一精神労働者として、オーエン・ブルジョア説に若干の評論をしてみたい。

## I

オーエン・ブルジョア説はいわば国際的のものらしく、外国でもおこなわれているようで

ある。というのは、筆者がオーエン生誕 200 年を記念するイギリスの書物や雑誌をすこしばかりみて気付いたことである。それらのうち、おもしろいものを二つとりあげ、評論的にあらましのことを紹介してみよう。

その一つは経済史学者の記念論文である。イギリスの Strathclyde 大学の研究者たちが、オーエンの各方面を分担執筆した論文集が出ている。<sup>④</sup> それらの執筆者たちは、つぎの点で共通している。すなわち、オーエンは従来博愛家であるとか社会主義の父とかいわれてきたが、本当はブルジョア、しかも成功した資本家であったということ。筆者はその著書のなかで「オーエンと労働者階級」というテーマで書いた Fraser をとりあげる。この著者がどんなひとか知らないが、実証的な歴史研究を標榜しているのはたしかで、「イデオロギーに束縛されない」研究者のようである。有名な New Lanark 工場の所在地に近いところ、いわばオーエン思想の根拠地の大学でオーエンを記念するのだから、それだけ多く Fraser の史観的公正さは自信のあるものというべきだろう。

Fraser の論旨を筆者が大づかみにするとつぎのようである。彼はオーエンと労働者階級との関係を三時期にわけ、そのいずれの時期でも、オーエンはブルジョアであり、ブルジョア思想をもって行動したというのである。

第 1 期オーエンが雇用者として労働者に関係した時期。その典型的なのは New Lanark で 2000 人余の労働者の雇主だったときである。そのころのオーエンの関心は、当時の資本家 (Fraser は産業家といっているが) が共通にもっていたもので、資本主義的工場生産に適合した近代的労働者の確保ということであった。安定し、訓練された、労働効率の大なる労働力を形成し、確保したいという志向である。New Lanark 工場でオーエンがつかった労働者は、ハイランド地方から追いたてられて来た農民を主としていた。だからかれらは工場の労働や生活においそれとなじめない。むしろそれをいやがる。オーエンのいうところによると、かれらは仕様のないなまけもの、酔いどれ、不品行な連中であつた。不潔きわまる家に住み、じだらくな習慣にとらわれ、近代的労働者としては最低であり、社長たるオーエンにちっとも従順でない。その理由について、それはオーエンがスコットランド人からみてよそのものであつたせいではないか、一時期オーエンはそうおもつたが、これがこだけ例外のものでないことはすぐさとられた。かれら労働者はついさきころまで独立的な農民であつたのだから、近代的労働者になるには教育と訓練をうけねばならない。かれらをどう教育するか。これは当時の資本家がみなかんがえたことで、オーエンはその一人であつたにすぎない。

オーエンは、酔いどれをなくすために居酒屋を追放し、泥棒については盗みがすぐ摘発される防止策を考案、仕事をさぼるものにはモニターをつかつて勤務評定をした。労働者の定着をうながすには、住宅問題、家人の就職、病人老人問題を保障することをかんがえ実行した。このような措置によってオーエンはなにをかんがえたか。Fraser はいふ。

「オーエンはこれらの措置によって労働力として投資する資本を効率的に使用し、むだを節約したかったのだといえよう。生きた機械をたいせつにすれば、それだけのもうけがあるというのがオーエンのかんがえだ。清潔、健康、教養、理性これらをそなえた労働者は効率の大なる労働力ということが出来る」と。

オーエンとふつうの産業家との違いは、オーエンが暴力をもちいなかったことだけで、物いわぬモニターの考案といつても、あれは当時 Cheshire の或る綿業家が実施していたのを

借用したものにすぎなかった。

第2期は性格形成にかんする第1論文を出した1813年から10年ほどの期間。オーエンはさかんに文筆活動に従事した。この時期のオーエンの特徴はどういうものか。社会不安、混乱、無秩序にたいする心配、これが主要なものである。オーエンは資本家、政治家その他特権階級にたいし、労働者階級への譲歩をすすめ、かれの計画にしたがい上からの社会改良をおこなうことを忠告した。労働者のうちつづく苦難は統治者と被統治者のあいだの正常な関係をこわしてしまふ。労働者が時期尚早な暴力的社会変革をおもうようになってはたいへんで、社会的調和はどこまでも保守しなくてはならない。これがオーエンの主要な関心であった。Fraser は当時オーエンが Liverpool 伯におくった文書を紹介しているが、それには「本当にものわかった政治家なら、賢明な対策をたてて労働者階級のうける害悪の増大をふせがねばなりません。政治家が手を拱いていたら、かれらが指導と統制の義務を負っている社会制度はこれらの害悪によって無茶苦茶になってしまわざるをえません」とある。

Fraser はそれにつづいて、オーエンのそうした革命にたいする恐怖心は、当時の情勢からみてとうぜん、資本家が共通に抱いたものであることを説明している。オーエンが性格形成論を公表しはじめた1812年頃以降いろいろの事件があった。たとえば Nottinghamshire の靴下編工の間にはじまり、Cheshire, Yorkshire にひろがったラダイト運動。しかしオーエンをおそれさせたとおもうのは、スコットランドの織工のストライキであった。1809年に創立されたスコットランド織工連合会は、織工の最低賃金制の制定を議会に陳情したが容れられない。そこで物価に見合った賃率を Lanarkshire の治安判事に要求した。治安判事はいちおうその要求をもっともみなし、法律的承認をあたえたが、資本家が応じなかったため一大ストがおこった。オーエンはその治安判事の一人だったことに注意。このストはたちまち規模をひろげ、Aberdeen から Cheshire にわたるもの、いわば国民的規模のものになった。スコットランドの織工たちは Midland のそれのように過激な手段を採用しなかったとはいえ、政府当局をひどく狼狽させた。労働者の経済的窮乏が政治的叛乱に発展するのではないかという恐怖を、治安判事の一人としてのオーエンはわけもったにちがいない。

博愛家とか社会主義者とかいわれるオーエンの実体はブルジョアであるのだ。ところが、Fraser の公正な解釈は上述の見解の連続として、一步すすんでオーエンの反動性をひかえめながら示唆している。オーエン・ブルジョア説にはこれがとうぜん含まれるとおもわれ、この点筆者としても興味をもつところである。

Fraser は Thompson の指摘をよりどころとして、オーエンが権力と結託していたうたがいがあるとしている。それには二つある。一つは、労働者から蛇かつのようにみられた労働運動の弾圧者 Lord Sidmouth をオーエンは〈やさしくて、愛すべき人〉とってほめるのを常とした。もう一つはもっとオーエンの姿勢を疑わせるものである。オーエンは労働者階級を裏切ったような人間を自分の学校の副校長にしてなんともおもわなかったということ。それは Alexander Richmond というあやしげな男である。この人間は曾てスコットランド織工連合会の指導者の一人であった。大弾圧をうける過程でかれは権力のスパイになりさがあったという。Fraser はさすがにこれでもってオーエンの政治的節操をうたがうとまではしないで、その政治的鈍感を示すだけ述べている。しかしオーエンが社会変革の進歩的立場と思想をもったひとではないことを推論させようとしているのはたしかだとおもう。筆者とし

ではこのことを全然無意味とはおもわないけれど、大なる問題はオーエンが Richmond を使って経営した学校教育が反動的であったかどうかを吟味することにあるとかがえる。ともあれ、Fraser は要約していう。「オーエンは労働者階級の状態の改善を提唱したが、しかしその真意はそれによって社会秩序の混乱をふせぎ、上層階級の富の蓄積を保証し、労働者を商品購買者としてたいせつにしようとする点にあった」と述べている。

第3期は「ラナーク州への報告」が書かれた1820年以後である。オーエンが直接労働者階級によびかけた最初は1819年のことである。「労働者階級への訴え」がそれである。しかし Fraser によるとこの文書の基調はそれ以前のものとかわっていない。労働者に階級的憎悪心や暴力主義を捨て、空理空論のかわりに実際をおもんじること、富者と貧者、統治者と被統治者の利益は共通であることを説いているのである。

ところが「ラナーク州への報告」にいたって新しい態度があらわれてくる。Fraser はこれを従前の倫理主義から経済主義への移行としてつかんでいる。筆者はこういう把握は形式的理解だとも思う。社会主義的性格をつよめていく変化とみなくはおかしい。とにかくも、Fraser によるとオーエンが経済主義的考え方にかわってきて、それが結果的には労働者的になることをみとめるということにはなっている。肉体労働は適正な指導のもとではあらゆる富の源泉となるという前提にたつて、労働を価値の自然的尺度とする思想と制度を採用せよ。これを実行すると、労働者を苦しめる賃金制度は消滅するだろう。賃金奴隷の制度が廃止されるということは、生産の協同化、財産の共有の思想を実現させることを意味する。ところで、このような提案を上層階級殊に資本家が賛成するわけではない。ブルジョア・オーエンはそれでどうなったのか。

Fraser によると、それはどうもなかったものではない。たしかにオーエンの提案の労働者の性格をつかんだものは現われた。しかし、オーエン自身は自分の提案のなかに含まれる独異性、いわば社会主義的性格を自覚することができなかったのである。自分で自分のいうことがわからなかったと Fraser はいう。オーエンをブルジョアと固定するかんがえは、上述の移行の解釈に苦しむのは、いかなるときにも共通だと筆者はおもうのだが、Fraser の場合もそれを示している。

そこで、オーエンの思想と労働者的になったオーエン主義 Owenism はまったく違うものだという Fraser の解釈がでてくる。オーエン主義の労働者のなかに普及したのはオーエン滞米中のイギリスにおいてであったこともそれを示唆するだろう。

Labor Exchange や Grand National Consolidated Unions などを通してのオーエンと労働者階級とのつながりはあまり本質的ではなかった。一方では労働者が目先の経済的利益を主目的に運動する傾向におちこみ、他方では生産の協同を資本家を廃除したうえでの事業と考えるところ、こういうのがオーエンの人類全体主義や教育重視の傾向と合致しない。そういう両者の不一致を Fraser は一貫して、オーエンの社会的混乱をさけたいとする保守性によつたところ大なることを指摘する。Fraser はオーエンが Pioneer の編集者にたいして、雇主と被雇者とがだいじな富の生産において感情・利害で断絶をつよめるのはよくないと訴えとおしたことに注意する。そして所詮は、労働運動に近づいた1833年の時期はオーエンにとつては一時的な精神の倒錯にすぎなかったのではないかという。なおオーエンが労働者に一時的にせよ迎えられたのは、オーエンの Chiliasm (千年期説) 的な社会変革の熱情みたい

なもの、当時の労働者の極端な自負心に合致したのではないかと説明されている。筆者としては、当時の戦闘的労働者の小市民的性格を考慮すると或程度うなずけるけれど、それは現代の社会主義をユダア的終末観で説明しようとするような心理主義的な形式的見方にすぎないようにおもわれる。

## II

いま一つ紹介してみたい論文は Alan Rogers の R. Owen and British Socialism である。これは Marxism Today 誌1971年11月号の討論欄にでたもので、同誌5月号のオーエン生誕200年記念のために掲載された Ruth and Edmund Frow の論文 R. Owen and Early Socialism におけるオーエン解釈を反論したものである。<sup>⑩</sup>

Frow らはどういう解釈を出したのか。かれらはだいたいつぎのような観念にたっていた。19C初期はイギリスの労働者階級がやがて同世紀中期のチャーチスト運動や労働組合運動のなかにその階級的エネルギーをそそぎこむための準備期に相当する。家内工業労働者、工業労働者、農業労働者、商業労働者、土木交通労働者、これら諸層の労働者の階級的自覚の成立期であった。この時期に階級的自覚をうながす宣伝と教育の活動がほうはいとしておこったが、その運動と思想がすべてオーエンの名とむすびついている。著者の Frow は大学教授の研究者ではないようだが、それだけに簡明にいう。「オーエンは英国初期社会主義者のうちもっとも偉大であるし、労働運動の発達に最大の影響をあたえた人である」と。

Frow はオーエンとともに、労働者解放運動の先輩として、John Bellers, Charls Hall, Piercy Ravenstone, William Thompson, John Bray, Hodgskin などをあげている。

オーエン思想の特徴は資本主義的生産関係のもとにおける生産力増大と労働者階級の窮乏との矛盾に着目し、これを改善しようとしたところにあり、本性上社会主義的であった。かれが社会改良に上層階級の力に期待し、大衆にたいして家父長的姿勢でのぞむ傾向はあったけれども、幻滅の体験を経て、とくに Tolpadl Martyrs, 労働組合大連合への参加の経験などにより、オーエンは労働者階級から大なる尊敬をうけることになったのである。だいたいこのようなのが Frow の見解である。19C初期の社会主義が科学的社会主義と区別されねばならないのはとうぜんであり、Rosenberg などによればその多くは小市民的観念論にとらわれたものとされている。しかし Frow はそれらを一括して社会主義的労働運動として評価する。筆者からみても、そこでは Rosenberg 的な厳密さはないようにみえる。<sup>⑪</sup> よい意味でもわるい意味でも大衆的解釈のようだ。オーエン思想においても、Frow はいわゆる労働全取権の観念（それはリカード派社会主義の小市民的思想の特徴であった）に着目し、そのところが資本家階級にたいする自負心と革新的行動を激励したものとみる。

「労働者がかれの労働の価値の全体を取得していないのは明瞭である。もしそうでなかったら、すなわち労働者が労働の価値をすべてわがものにしたとすれば、労働者は富者とまったく同様に裕福になるのはまちがいない。そうなる以外なりようはない。なぜとって、この世に存在し、曾て存在したいかなるものも、労働者階級が生産したもの、しかも労働者階級だけによってつくられたものだからだ。」このような Crisis 誌の訴えは、Crisis を機関誌とする労働者のなかにオーエンがどういう点でむすびついているかを示している。下層階級とい

う呼称をすてて労働者を生産的階級と規定した後のオーエンは、支配階級からは Jacobin とか Levellers のようにおそれられたが、労働者からは大なる尊敬をうけたというべきである。大衆運動家であるらしい Frow らは、そんなふうにオーエンを労働者の友としてもちあげていたのである。

これにたいして Rogers は、こういう解釈はまるで教条的であると反論する。そういうオーエン歪曲は、ほかでもない、今日のイギリス労働運動の発展を期するうえで有害であると指摘する。筆者が興味をもつのは、こういうかんがえが労働運動の仲間のなかでいわれていることである。Rogers は Labor Party の一員としてたかかってきたものとして発言しているのだといっている。また、この論文を掲載した Marxism Today 誌はイギリスの前衛党の機関誌であることにも筆者は注目する。つまり前衛党とこれを支持したはこれと同盟する労働者大衆のなかでこのような問題が問題になり得るといことがわかるのである。

Rogers は、ひとくちにいうと、労働運動におけるいわゆる民主主義のたいせつなことを主張しているのである。労働黨員として26年にわたる活動の経験から、労働運動の成果は上からあたえられるものではないとし、あらゆる形態の hagiolatry (個人崇拜) にたいする嫌悪を表明し、Frow らのオーエン評価は有害な個人崇拜だときめつける。

いったいオーエンとはいかなるものか。それはすばらしく成功した実業家であり、その思想も行動も労働者的ではない。これが Rogers の基本的前提のようである。一見労働者の味方のようなオーエンは労働者の馴致策をかんがえたにすぎない。モニターによる勤務評定などはそのいい例証だ。オーエンのユートピア的漸進主義は労働者の、かれが設定した残忍な性格を改良し、その革命化の危険をふせぐ意図からきたものだ。オーエンはむしろ労働運動の統制をかんがえていたというべきである。Rogers は M. Cole などの研究をよりどころとして、オーエンが労働運動のすぐれた指導者 J. Morrison とか J. E. Smith のごときひとにどうふるまったかとせめる。これらの指導者はその経済分析において、階級闘争における煽動、戦術、戦略のたてかたにおいて、マルクス以前の人としてはすばらしいものであった。しかるに、オーエンはどうか。資本家階級を批判したとしても、言葉のうえだけでさえ、これとたたかうことをみとめなかったではないか。そういうオーエンの姿勢は Morrison や Smith の足をひっぱるに充分な役割をはたしたのだ。

Rogers によればオーエンの思想と行動とは、英国労働運動の歴史的弱点と関連しておる。その第一は理論学習の軽視である。或るいは本を読まないという弱点である。活動家は読む必要をかんじないものが多く、ひどい場合は自分らの社会主義新聞さえよまない。オーエンはおよそ他人からものをきくことを必要としないひとではなかったか。その傾向はオーエンの家父長的性質とむすびついている。Rogers は M. Cole もそういっているといいつつながら、オーエンは平等とか理性的とかを尊重するといいつつ、決して democrat ではなくて autocrat というべきだときめつける。オーエンはなんでも知っており、万人の模範であり、労働者は自分の指導に従えばいいとかんがえるみたいである。そんなわけで、オーエンは労働者階級の社会主義の発達を本当は阻止するのではないか。哲学者の Lews は英国労働運動の Philistinism について注意しているがオーエンは、そういう伝統的缺陷を助長するのに寄与したというべきだ。Rogers は Autocrat の精神がプロレタリアの内部でも問題にされなくてはいけないとし、とにかく Frow らのオーエンにたいする個人崇拝はがまんできかないと論じて

いる。

正直のところ筆者は Rogers の反論にはおどろいた。英国労働運動の欠点というものが想像できないわけではないが、オーエンをこのようにけなしてしまうのは、かなり暴論に近いとおもう。Rogers が労働運動家であるだけにこういう見解が反共的修正主義に激励をあたえることをおそれるものである。しかしまた個人崇拜が社会主義や一般の労働運動のなかでブルジョア的な官僚主義とむすびつくことがあるのは、歴史上の事実としてもおもいしらされていることもたしかである。それゆえ Rogers 風の批判も、人民内部の矛盾をきちんとかんがえよという趣旨にとれば、大いに参考になるというべきである。

### III

オーエン・ブルジョア説は、わがくにでもさいきん経済史家、思想史家のなかであらわれていることは前に述べたとおりである。土方氏によるとそれらはマルクス主義の観点に立つひとのものだとのことである。筆者は本当にそういうものだとはおもわないが、しかしその問題はひとまず脇においておく。

オーエンが成功した資本家であったという規定についてかんがえてみよう。問題はオーエンの思想である。思想はそれを所有する人間の行動と内面的に連関しているものとして問題にされなければならない。そのさいオーエンの社会的身体ともいうべき階級性を問うことはいちおう理性的なことである。しかし、そのことからオーエンの思想はブルジョア的であるとうまい具合に対応するというだけではおかしい。そのさいすくなくともつぎのことを着目するのはだいじである。ブルジョアといってもどのようなブルジョアか。とくに重要なのは、階級闘争のなかで、換言すれば搾取階級と被搾取階級とのたたかいのなかでどのような地位をもったブルジョアか。この問題が一つ。さらに、ブルジョア・オーエンの性格形成の歴史、その出身階級の特性を含め、いわば教育されてきた過程の意味が問われねばならない。この後者の事柄をさきにかんがえてみよう。この面を問題にただけでも、オーエンの思想を単純にブルジョア的と規定し、そのみがかすばらしく成功した資本家のものだとはいえないことが推論される。

オーエンの出身階級については、じゅうぶんに説得的な研究があるかどうか浅学の筆者はよく知らない。オーエン自身の自叙伝や Podmore や Simon のオーエン伝記はよく知られているが、<sup>⑨</sup>そこでも理論的な出身階級の分析を知ることはむづかしい。しかし、それらのものをみていえることは、オーエンはいわば小市民の出身だということである。かれの郷里ウェールズの Newtown は、すぐ後にはよごれた工場町になったとしても、オーエンの少年時代には、若干のフランネル工場をのぞいては昔ながらの産業をいとむ純朴で美しい田舎であった。父方の先輩はかなりの財産所有者であったが、幼いオーエンは父から父が相当の土地を手離したことの愚痴をきいている。父は馬具商、金物商、郵便屋と多方面の仕事で家族をやしなわざるを得なかった。部落の役職について公事に熱心なひとだったという。母方の親類はオーエンに大いに影響をあたえたようだが、律義な農民であった。ひろい世間への好奇心と知的憧憬をもった少年オーエンはすでに啓蒙的な自由の思想を形成しておったとみられるが、農民的商人的小経営者の出身であったことは注意すべきである。それからの過

程はまさに self made のひとである。初期の綿業資本家は、多くの場合、小市民や職人の身分から漸く立身出世したばかりの無教育で、粗野、下品しかも人一倍勤勉で、活動的で、目さきのきく連中であつたようである。オーエンはこれとはだいぶ違った資質をもっていたが、階級的にはかれもこういうグループの一人であつたとみてよいかもしれない。

オーエンの思想とオーエン主義労働者の思想をむしろ上述のような小市民出身にむすびつけていく史家もいるほどである。<sup>⑧</sup> こういう史家の説によれば産業革命の生みだした工場制資本主義をオーエンは小市民のまなこでながめたのである。市民革命を経た独立の小経営者の立場である。そこに資本主義的批判のオーエン的性格があるというのである。論者によればこうである。オーエンは工場制資本主義を「競争制度」として批判した。この制度は自由労働市場と分業をとともなう。前者によって雇主と被使用者のきずなは切りさかれてしまう。後者によって貧困と無知、浪費、相互嫉視、犯罪、肉体と精神との著しい低能状態がもたらされる。労働市場と分業にオーエンは反対する。そのさい批判の基準はなにかといえ、生産手段を直接みづから掌握し疎外を知らぬ小経営の立場の理想化である。集団主義が社会主義的にみられるかもしれないが、集団的独立によって目的を達しようとしたとみられる。オーエンは資本主義一般を批判したのではなくて小経営の独立性をうばう産業革命中期の資本主義に反対したのである。だからこそかれに共鳴したものは、大規模工業で働く労働者ではなくて、まさに小生産者ならびに家内労働者であつた。だいたいこういうのがオーエン・小ブルジョア説の論旨である。

この説はオーエンを成功した資本家とみる見解よりは筆者などにとっては理解しやすい。というのはオーエンを一貫して野党的にみていくことができるからである。しかし、じっさいオーエンは成功した資本家になったこともある。いぜんはそうでなかったが、そうなり、またのちにはまたそうでなくなった。このことだけからみても、オーエンを成功した資本家とみるのと同様にオーエン・小ブルジョア説もオーエン思想を固定的に階級的類型によって特色づけるのは困難ではないかとおもう。この説は産業革命期のいわゆる労働運動（たとえばラダイト）のエネルギーを独立をうばわれる怒りに求めていくというような或る意味では合理的な解釈も提出して、なるほどと教わることも多い。しかしオーエンの社会主義的側面の実体を小市民のイデオロギーとして消去していく点は問題である。

社会政策研究家の戸塚秀夫氏は工場法成立史の研究のなかでオーエンの地位を論じている。<sup>⑨</sup> このひとは従来大河内一男氏らにおいて典型的にみられたように、いわゆる「原生的労働関係」の支配を固定的なものと想定し、これを克服していくことを可能にさせるものとして国家的干渉としての社会政策を評価するかんがえを批判したものである。大河内氏らの独断は歴史的事実の実証的研究を軽視したところにあるとし、イギリス工場法の成立史は、むしろ資本家のイニシャチブで（国家的干渉なしで）工場法を成立させたという事情を示すと説いている。ただ原始的に労働者の搾取を飽くなく追求するのではなく、これをだいにする開明的工場主が出現するに至つたといひ、オーエンはその一人であるにすぎないと説いている。そのような工場主の開明性の主要な側面として戸塚氏はつぎの諸点をあげている。

①労働者酷使にたいする反省。団結禁止法はむしろ有害であり、却て労使間の信頼感をつくることが重要である。②労働時間の短縮、これによって労働者はその義務を良心的に果そうという気持をつよめるだろう。③婦人、年少者、児童の肉体的精神的状態への配慮。教育



の重視。成功した産業資本家オーエンは産業資本のいわば人格化につきるというわけである。

「イギリス急進主義の研究」の著者永井義雄氏は、オーエンを哲学的急進主義つまりベトナム主義＝功利主義の系譜でとらえることを提唱し、空想的社会主義は功利主義の極端な、例外的な、しかしその例にすぎないと説く。そしてこのことはオーエンをプロレタリアの見地にたつひととみるのでなく、成功したブルジョアとしてとらえねばならぬとの見解に通じる。つまり、そのかぎりでは戸塚氏と似たオーエン解釈になっている。

労働者を生きた機械とみなし、それに手入れをおこなうこと、これが性格形成原理のねらいであったとすれば、それが「あめ」と「むち」の双方を含むものであったのは当然であろう。「人道主義者」あるいは「温情家」とよばれるオーエンの真の姿はこのようなものであった。それだから、性格形成原理は資本主義批判の原理の思想的基盤になっているだろうか。あきらかにこたえは否であり、労働者は資本主義批判の原理をおしえられたのではなく、むしろ馴致されたというべきであろう。こういふ高い調子のオーエン・ブルジョア説である。

永井氏のばあい、戸塚氏などよりも多く、オーエンの思想自体に関心をもっておられるようであるが、オーエンをかれの所属する階級の特殊的人格化としてつかむのは共通している。そこから当時の産業資本家階級のイデオロギーとしての功利主義の類型のなかにオーエンをはめこむ努力がなされているらしい。筆者の見解からいえば、氏のオーエン思想（或るいは思想一般）の理解の或る種の生硬さ（外証法的ならぬ）性質がでているとおもう。氏はオーエンの空想的社会主義への移行を説明しなくてはならないが、そこでもオーエンが資本主義を批判したのではないことをいい、功利主義の或る特殊なものということに結局はしてしまうようである。とにかくこういふ見方ではオーエンの思想史の全体を一貫してつかむのはじっさいはなかなか困難になっていくようで、これはなんとも仕方のないことにおもわれる。

上述したようなオーエン・ブルジョア説はどうにも納得がいかないとして、いわばこれを反論するための問題提起をしている人もいる。若い教育史学者の武田晃二氏はオーエンの伝記の研究にうちこんでおられる。氏は「R. オーエンにおける合資関係変遷の思想的意味」というおもしろい研究を報告している。<sup>⑩</sup> これはオーエン・ブルジョア説への疑問を提出したものだと思える。成功した資本家がオーエン思想と内面的関係が必然的にあるといえるか。そうはいえないのではないかと。オーエンが成功した資本家であるといっても、かれの経営者としての実体はけっして一様ではなかった。18才（1789）のとき帽子製造の針職人と共同で紡績業をはじめたときから、共同経営者→単独経営者→支配人→合資兼支配人→合資筆頭支配人とかわっている。ラナーク工場を捨てた1825年以後再び資本家にはなっていない。この変遷の過程はオーエンの資本家として成長する歴史であり、その同じ時期は産業資本の抬頭期に相当する。しかしそれでもって、オーエン思想＝成功した資本家の思想という対応関係を出すことができるか。そのころ成功するとはどういうことだったのか。Morton もいうように、機械生産がまだ一般的になっていない時期における超過利潤は資本の急速な蓄積と産業革命の初期における生産拡大を説明するものであり、最小限の資本をもちあわせているか、あるいは手にいれることさえできれば、精力的で能力のある人びとに無限の前途をひらいてくれ、新しい生産方法を取り入れる能力をもったものには巨額の超過利潤と成功が保障されたのである。武田氏によるとオーエンの成功とその思想はかならずしも

必然的に結合しない。その思想は資本家的成功とはべつのところからきたのではないか。職人あがりで発明的タレントをもった職人の申込みに応じて当時導入されはじめた新機械で紡績業をはじめた。新機械に何の知識をもたなかったオーエンは技術にたいする教養をつむとともに、事業を成功させるためには発明力だけで不十分であることを洞察した。かれは「朝は一番早く出勤し、最後に工場を出た。いろいろの部門の職工をきわめてうまく監督した。」成功の主因が発明的素質と経営的手腕の組合せによらねば成り立たないと知って、かなり繁昌していたけれど、おしげもなくこの職人との共同経営をやめる。つぎに当時すでに一人で工場経営をやるのがむつかしくなっていたのに、短期間ながら三台のミュール機をつかって紡績業を独立経営をして、相当の成功をおさめた。武田氏によるとそれはオーエンの個人的資質の優位性と多面性を示すものであってもブルジョア性を証明することにはならない。またこのとき以後独立経営を志向しなかったのも注意すべきだと氏は述べる。そのつぎにドリンクウォーターの経営する工場の支配人募集に応じてその地位を得た。20才の若さで500人の男女小児を雇う大工場の支配人となった。たいへんな仕事である。「どうして自分はここにきたのか。いったい自分にできるのか。この人たち、この商売をとりしまっていくことが」と自叙伝でオーエンはそのころを述懐している。筆者はここで武田氏の報告をよみながらかんがえた。繁昌している独立経営を捨ててこういう大工場にきたのは、致富心とか小経営の独立自由の精神とからくるブルジョア的或いは小ブルジョア的動機からだと断定できないだろうという観念をいだかざるをえない。ここでオーエンは業務管理、原料購入、機械製造、綿糸製造、販売、計算帳簿、賃金支払を一手にひきうけ、とくに労働者の管理に大成功をおさめたのである。労働者の高賃金を保障し、労働者の規律と訓練で当時マンチェスターの内外でどの工場よりもすぐれた状況をつくりだした。これらの成功とそれを可能にさせたオーエンの資質はまさにブルジョア思想だといわれるかもしれない。武田氏はこの解釈を念頭においているとおもわれるが、これに対する反論の証拠としオーエンがこの工場を去る経緯をこまかく追究している。

オーエンはドリンクウォーターの絶大な信頼を受け、一年後には支配人としてでなく合資人として迎えるという協定をむすんだ。この新協定にオーエンはたいへん満足したのだが、それはなぜだったか。この協定で、工場の利益に有利と思われるときには、オーエンは自分の思う途を実行できることをよるこんだのではないか。もちろん工場の利益を増進するかぎりというからには、経営のブルジョア的性格をみとめねばならぬわけだけれど、その点にまだあまい観念をいだいたオーエンは、このような自由でもって自分の原理を実現するために有益だとしたのではないか。武田氏はそこにブルジョア性をこえたオーエンの思想がはたらいっていたことにかかなり大なるアクセントを置いている。

ドリンクウォーター工場の成功に目をつけて合資者として割りこんでこようとした大資本家オールドノウおよびこの申し入れを受諾したドリンクウォーターにたいするオーエンの出方に特徴がある。オーエンは致富心の野心家オールドノウとどうしても一致しない。どんなことがあっても一緒にやりたくないとおもうどの方とも関係したくない。そういってオーエンは断固としてドリンクウォーターの面前で協定書をやぶってしまう。後年オーエンはこの行動について感情にかられたもので、判断したものではなかったといっている。武田氏はここで、しかしながら、その「感情」と「判断」とは矛盾するものではなかったこと、自己の社会改

革の思想を実現するためという点で、感情も判断も統一されるということを説いている。このへんは示唆に富むおもしろい指摘だと筆者はおもう。オーエン自身ニューラナーク工場で実現をねがった原理はすでにドリンクウォーター支配人時代にいただいたものと同質であることを述べているのである。その後の合資者を変えていく選択の動機も、だいたい上述のばあいとおなじであり、一貫してブルジョア思想そのものが基準ではなかった。

武田氏はドリンクウォーター時代における「マンチェスター文学・哲学協会」の会員として自己形成にはげんだ意味について注意している。筆者も賛成で、これまた重要だとおもう。というのは、そこでもオーエンの功利主義の自己形成が主導的なものであるかどうかというのが、興味のあることである。オーエン自身はドリンクウォーター工場での成功について、商店員時代の商品（織物）の品質を検討する能力とか、幼くして宗教の偏見を克服したことによって得た人間性の知識の役割について語っている。しかし、マンチェスター文学哲学協会での自己学習の意義は大きかったであろう。この協会はその成員の出身階級からみてもその野党的で自由な運営法（討論、研究テーマの範囲など）にしても、ブルジョアの射程を越えていたように見える。ここを拠点として仕事に没頭するかたわら毎日すくなくも4時間の読書研究を欠かさないというはげしい勉強がつづけられた。かれはここで4回の報告をした。Remarks on the Improvement of Cotton Trade. Nov. 29, 1793. An Essay on the Utility of Learning. Dec. 27, 1793. Thoughts on the Connection between Universal Happiness and Practical Mechanics. Mar. 13, 1795. On the Origin with a View to the Improvement of Social Virtues. Jan. 13, 1797. その内容はよくわからないが、その学友からReasoning-machine とよばれたオーエンが環境決定論の基礎をかためつつあったことは想像される。また Podmore がいっているように、協会長の内科医 Percival からうけた影響は大きいとみられる。この先生は当時いちはやく工場環境条件とそこで働く労働者のこうむる害悪の改善について唯物論的方法をもってかんがえ解決する態度をもったひとであり、その先生をオーエンは敬愛してやまなかったとのことである。

つぎにこの節のはじめに述べた第一の問題、すなわちオーエンの階級闘争全体のなかで占める地位にかんする問題をかんがえてみよう。

これは歴史的研究にもとづかねばならないことで筆者などまことに困難をきわめる仕事である。ところが実証的で科学的な研究者の仕事を見ると、びったりと合点がいくものがすくない。これはどうしたわけかとなさげなくなる。三木清がよくいっていたが、歴史は書かれるものであり、それぞれの時代にひとは階級闘争の見地から、歴史を書きかえねばならない。こういうとりようによっては主観主義にとられそうなこともいいたくなる。それはしかし実は歴史の真に客観的研究と結合し得るのだともいえないか。レーニンや野呂栄太郎などの史的研究にはそんなことを思わせるなにかがあるようにおもわれる。

歴史に素人の筆者などは例の Webb の著作などは実に有益である。オーエン時代の階級闘争の全体について見透しを得ようとするには役に立つ。それともいまの研究者にはあんなものは水準の低いものということになっているのだろうか。それらの資料にもとづき、あとはオーエンの思想学習の人民的意義をかんがえる見地から、上述の問題について大胆な原則的なことを述べてみたい。それはつぎのことである。オーエンは当時の階級闘争の全体のなかで保守反動の役割を果してはいない。そこでオーエンの思想のあれこれの要素を理解する

という思想史研究においては、そのオーエンの立場から逆算してかんがえてみなくてはならないということこれである。

英国において大局的にいって例の団結禁止法の廃止の時期をもって産業資本家の進歩的役割はおわるとみてよいのではないか。産業資本家のイデオロギーとして功利主義をあてるのは、概して適切であろう。そこで、前記の逆算にみちびかれて、オーエンの生涯をとおして、その思想のあれこれの要素を功利主義をはみだすものとして、位置づけていこうとするのはゆるされることではないか。科学的社会主義の創始者が規定した空想的社会主義者オーエンをオーエン思想の歴史の変遷をつつむ力動的な全体としてつかむということである。さらにいうなら、その後の歴史、階級闘争のなかで光ってくるもの、人民の側を激励する養分になるものを取りだしオーエンを解釈していくのはむしろ正しい解釈となるのではなからうか。

筆者はさきころドイツ民主主義人民共和国の哲学雑誌でおもしろい記事を見た。それはドイツ科学アカデミーでおこなわれた「進歩的哲学遺産と社会主義的意識」というコロキウム報告である。この討論の結語によれば進歩的哲学的遺産のただしい継承は、科学性と党派性との統一という方法によってのみ可能となると。それをいままぜいいうかといえ、今日の階級闘争において前衛とそれに組するいろいろの非共産主義者たちとの政治的同盟、いわば横の統一戦線が重要だとすれば、まったく同様に、縦の統一戦線がきわめてたいせつだということを確認したいためである。マルクスレーニン主義はそれに先行する進歩思想、非コムニストとの一大統一戦線をつくる必要がある。オーエン・ブルジョア説はこの点でどんな役割をもつか。オーエンの反動性をひきだしたり、個人崇拜の Paternalism を心理主義的にとりだしたりするのは縦の統一戦線をどうとらえるのだろうか。それゆえ筆者は Rogers, Fraser, 戸塚氏、永井氏の説のどれにも納得がいかない。

オーエンの時代の階級闘争において労働者階級における特殊性、つまりあのころのたたかう労働者が今日の組織労働者をモデルにしてつかむことのできないものだったことはいちおう注意すべきである。これは実証をおもんずる史家が近頃こまかく説明してくれている。ひとくちにいうと労働運動の主体が小所有者 artisan であったということである。しかし、そのことからあの時代の運動を社会主義につながる統一戦線の側からつかむことができないとするとおかしい。その意味で、こまかい点の解明は別として Frow らのオーエンおよび初期社会主義者の位置づけに筆者は原則的に賛成である。

たとえば綿紡績労働者をとってみる。そこでも artisan 風の男子労働者がいちばんむこう意気がつよく、婦人児童の労働者はかれらの前で小さくなっていった。しかし他方綿業労働者の三分の二は後者のはんばものとみられた婦人児童たちで構成されていた。その他農業、採炭ほかあらゆる労働現場でプロレタリアが成長しつつあった。そういう層が階級闘争の主役をなさなかつたとしても、労働者の条件改良のたたかひの過程で、一方において artisan 風の労働者がみづから半端者として差別したプロレタリアとの連帯を志向し、他方では半端者が自信を増大させていくという結果を生み、全体としてそれが労働者階級の社会主義化の大道を歩むことになった。だいたいこのすじみちは、自覚しなくても、多くの誠実な史家の一致しているところのようにおもわれる。科学的社会主義の創始者がいうように、社会的条件が成熟しない時期に、人間の人間にたいする搾取を廃止をねがった空想的社会主義—科学的社会主義の先輩—としてオーエンをとらえなくては、却てオーエンの矛盾したところもわか

らなくなるだろう。肝要なのはこんにちの人民のたたかいのなかで縦の統一戦線をいつも念頭に置くことであろう。だからオーエンを科学的社会主義者そのもののようにとることが正しいというわけではない。

(附記) このあとオーエンの思想の貴重なものについて論ずる予定であったが、ざんねんながら原稿締切に間に合わなくなったので割愛する。しかも書きあげた部分にしても、健康を害している状況のもとになされたものであり、意に満たないこと大である。しかし、紀要に応募することは大学教師として一大責任であるというかんがえをもっている筆者は、そういう任務をいちおう果すことだけで満足したいとおもう。

なお拙稿「Owenism における Utilitarianism の評価について」(信大文理学部紀要 1965年)に述べたオーエン思想についての筆者の考え方は、いままなお、基本的には変わっていない。関心のある研究者の一読を期待します。(1973. 11月末日記)

## 注

- ① 勝田守一・梅根悟監修世界学選集第26巻 おさめられた論文はつぎのとおりである。
  - 1 ニュー・ラナーグ住民への講演
  - 2 工場制度の影響にかんずる考察
  - 3 工場における児童の雇用について
  - 4 貧民労働者救済委員会への報告
  - 5 シチー・オブ、ロンドンタヴァーン第2回公開集会における演説
  - 6 ラナーグ州への報告
- ② 筆者が哲学史上または思想上社会主義の系譜の研究に関心をもちはじめた機縁は昭和26年信大文理学部に赴任してきたとき、古代中世哲学史の講義を担当したことである。そのさいもつともわかりにくい中世のスコラ哲学史の理解に苦しんでいたが、たまたま林達夫氏の戦前の中世思想史の研究を知った。その研究に示唆されてカウツキーの「トマス・モアとその時代」(拙訳法政大出版局あり)「現代社会主義の先駆者」「キリスト教の起源」などをよみ、かつげんと目がひらかれたおもいがした。筆者は昭和28年度の日本哲学会で発表した「Reformation 以前のキリスト教分派の神秘主義思想」(要旨は信大文理学部紀要第3号に発表)は最初の報告である。あの学会のあと名古屋の喫茶店で故三枝博音氏からきわめて有益な研究上の助言を得たことは忘れられない。氏は思想史研究における、とくに社会主義思想史の研究において技術史研究の重要なことを力説された。筆者の研究と教育の多方面性のためにその研究がふかく進められていないことをはじめる。若い研究者で、関心をもって野心的に仕事をしてくれるひとの出現することを期待してやまない。
- ③ 中央大学経済学部編経済論纂第10巻 3・4合併号「大淵彰三教授古稀記念論文集」1969, 所載, 土方直史氏「わがくにのオーエン研究史」
- ④ Robert Owen, Prince of Cotton Spinners—a symposium edited by John Butt 1971.
- ⑤ G Alan Rogers, Robert Owen and British Socialism,—Marxism Today Nov. 1971.
- ⑥ On the Bicentenary of Robert Owen's Birth : Robert Owen and the Early Socialist, Ruth and Edmund Frow—Marxism Today May 1971
- ⑦ ローゼンベルク「経済学史」下巻 新興出版参照
- ⑧ F. Podmore, Robert Owen, a Biography. H. Simon, Robert Owen. Sein Leben und seine Bedeutung für Gegenwart

- ⑨ 武居良明, 産業革命と小経営の終焉 未来社 1971
- ⑩ 戸塚秀夫, 工場法成立史論 未来社 1966
- ⑪ 永井義雄, イギリス急進主義の研究 頸草書房
- ⑫ 武田晃二, R. オーエンにおける「合資関係」の変遷の思想的意味——「教育史論考」所収」(北大教育史比較教育研究室 1972年刊)
- ⑬ ウップ夫妻著(荒畑寒村訳) 英国労働運動史
- ⑭ D.Z.F. 11, 1971

### Summary

#### Ist R. Owen ein Ideolog von Bourgeoisie ?

Kleine Notizen zum Studium Owens

Yoshiharu WATANABE

Robert Owen muss als ein Ideolog von Bourgeoisie und ein reaktionärer Denker gefasst werden: diese Konzeption der Auffassung“ des Vaters des Sozialismus in England”, ist in diesen Jahren von einigen demokratischen Historikern und auch aktiven Politikern in der Arbeitsbewegung (sowohl bei uns als auch in England) ausgestellt. Der Verfasser dieses Artikels, der dem Owen als einem utopistischen Sozialist und einem Freund von der heutigen revolutionären Arbeiterklasse die grosse Achtung geben will, hat die Kritik gegen diese obengenannte sonderbare Auffassungsweise versucht, zum Verstärkung der demokratischen Front im gegenwärtigen Klassenkampf.